

山形大学附属図書館・附属博物館共催
オープンキャンパス記念展示会

「直江兼続とその時代」展

PartⅡ 解説

平成21年7月24日～8月8日

はじめに

直江兼統は米沢藩初代藩主・上杉景勝の執政として、政治・軍事に活躍した名宰相といわれる人物で、現在好評オンエア中のNHK大河ドラマ「天地人」の主人公として注目を集めています。しかし、その実像はまだまだ知られていないところが多いと思います。

そこで今回、2007年のパート1につづき、本学図書館・博物館が所蔵する兼統関連の貴重な歴史資料を展示し、ご紹介します。「愛」と「義」の武将・兼統のなまの姿を物語る山形大学の宝物をぜひこの機会にご覧ください。

直江兼統の生涯

直江兼統（1560～1620）は、上杉家の家臣・樋口兼豊の子として坂戸城（新潟県南魚沼市）に生まれました。幼いころから上杉景勝の近従として仕え、天正9年（1581）直江信綱の死により、直江家を継ぎます。同10年（1582）、上杉氏は織田信長との全面対決を迎え、魚津城の戦いで多くの武将を失いますが、本能寺の変により、危機を脱します。

豊臣政権下では、上杉家の執政として、政権の中枢人物との対外折衝を担当したり、有力者との茶会・連歌会に参加し、その手腕を発揮します。

豊臣秀吉死後、徳川家康との間に緊張が高まると、讒訴（いいがかり）に対し断固とした反論をおこなった書状（直江状）をしたため、上杉氏の言い分を堂々と主張しました。

関ヶ原の合戦（慶長出羽合戦）では総大将として指揮を執り、戦後は城下町米沢の発展に力を尽くしました。享年60歳。

解説①

直江兼統の登場と魚津城攻防戦

大河ドラマ「天地人」は、上杉謙信在世中から物語が始まります。史料からは謙信の時代に兼統の活動は確認できませんが、景勝への代替わり直後から活躍しているところからみて、謙信の時代から上杉氏に仕えていたことは間違いないでしょう。

そこで、今回の展示会では、上杉謙信の活躍を物語る史料から紹介していきます。謙信の前の代、長尾為景は、守護代の地位にあったものの、地方領主（国人衆）を統率することができずに苦労しました。そこで謙信は、国人領主間の領地争いを仲介するなどして、着実に自らの支配を浸透させていきました（史料①）。

また、謙信は家臣への思いやりのこもった手紙も残しており（史料②）、そういった人間的な面でも尊敬を集め、人心を収攬していたものと考えられます。

その謙信も病に倒れ、天正6年（1578）、この世を去りました。いよいよ兼統の時代になります。

直江兼統の登場する天正9年（1581）は、織田信長による天下統一が目前に迫っていた時期です。当時、謙信なき後の上杉氏は信長方の軍勢に攻めこまれ、越中西部の諸城が陥落していたほか、同盟関係にあった武田氏も天正3年の長篠の戦いで降参勢の一途をたどっており、非常な苦境におちいっていました。

このような状況下で、上杉家当主景勝の側近として仕えていた樋口与六兼統は、急死した重臣直江信綱の養子となり、その名跡を継ぎました。のちの執政・直江兼統の登場です。

翌天正10年（1582）、信長の部将・柴田勝家率いる軍勢は越中の松倉・魚津両城に迫り、景勝は両城を支援するため天神山に布陣します。ところが、武田氏を滅ぼした森長可の軍勢が信濃口から本国越後へ侵入すると、景勝は松倉城の将兵とともに越後へ引き

あげざるをえなくなり、越中の守りは吉江宗信、中条景泰らの魚津城将たちに託されました。

しかし、彼らの奮戦もむなしく魚津城は陥落してしまいます。城将たちは名を後世に残すため、耳に名札を付けて自害したといえます。今回展示している城将から兼続へ宛てた書状(史料⑤)に見られるように、魚津城攻防戦への対処は、表舞台に出た兼続の最初の正念場となったことは疑いなく、この場面は兼続を主人公とする小説にもしばしば登場しています。

魚津城陥落の直後、上杉氏の元に本能寺の変の知らせがもたらされます。信長の部将たちはいっせいに兵を返し、上杉氏は九死に一生を得たのでした。

てんしつこういくしよじょう

史料① 天室光育書状

弘治元年(1555)11月4日

附属図書館所蔵 中条家文書

林泉寺前住職・天室光育が中条藤資に宛てた書状。光育は上杉謙信の学問の師である。この書状で、光育は謙信の意を受けて、代々境界争いが絶えない中条氏と黒川氏の間を仲裁している。謙信が国人争いの仲介することにより存在感を発揮し、中条氏ら揚北衆(阿賀野川以北の国人衆)を徐々に家臣団へ編入していったことが読み取れる。なお、本書状冒頭に、「今度者御陣旁二打続永々御在府」とあるのは、天文24年の第2次川中島出兵のことを指している。藤資は川中島の戦いに二度参陣しており、上杉氏を代表する武将と言える。

《翻刻》

今度者御陣旁二打続永々御在府、
御苦勞共無申計候、雖然与黒河御
間之取成、可被申之心底計二候、就之



所帯方之義、縦黒河様々被申事
雖多之候、鼓岡并名津居式ケ

所計二候、其外者於何事も且方不被
致納得候、遠路之事二候間、於下口誰人

兎角之義申之候共、不可有実義候、

御門送二雖可参候、却而御造作之

間、以使僧申候、将亦松岡源左衛門事

申候処二、御領掌忝存候、巨細之段

恕益二申含候、恐々謹言

(弘治元年)霜月四日 光育(花押)

《現代語訳》

このたびは出陣のご苦勞に打ち続き、長々の(春日山)御在府、御苦勞様と申し上げる他ないところで。黒川氏との(紛争の)取りなしは、心底からこれを申し上げるばかりです。これについては、方々からの意見によって、黒川氏が様々申されることは多いですが、鼓岡と名津居の二か所ばかりでしょう。その他はどの提案もどちらか片方が納得しないでしょう。お互い遠方にいますので、誰彼がとかく色々申し述べるでしょうが、実現性があるものではありません。直接参上するべきところですが、かえって御手間を取らせますので、使僧をやって申し上げます。また、松岡源左衛門のことをお願いしておりましたが、ご了承いただいていたとを、恕益に申し含んでおきます。恐々謹言。

史料② 上杉謙信（輝虎）書状

うえすぎけんしん てるとら しよじょう

天正2年（1574）8月7日

附属図書館所蔵 中条家文書



窺えると同時に、鉄砲で武装した加賀一向宗の強さも伝えている。

上杉謙信が吉江（中条）景泰の両親である吉江景資夫婦へ宛てた手紙。天正2年7月、謙信は軍を率いて加賀へ侵攻した。このとき加賀の一向宗門徒・若林雅楽助らの立て籠もる朝日山城（石川県金沢市）を攻めたが、堅固な要害で城兵がよく守ったため、これを攻めあぐねた。このとき初陣で弱冠18才の景泰は、謙信の制止を聞かず敵の鉄砲の面前に飛び出したため、謙信はこれを引き戻し、「いまにおしこめ」たので、心配しないようにと言っている。このときの合戦は激しく、景泰を負傷させては両親にすまないと思い、参戦させなかったものである。理解してほしいと続けている。猛将として名高い謙信の意外な一面が

《翻刻》

へつしてをもつて申候、あさひ（朝日）とりつめせめ候へは、いづれもとも候なかニ、れいの与次、おなしくき四郎、身の事もいけん申候へ共、もちいす、ひとりとてつはう（鉄砲）のさきへかけりあるき候、身の事ハふたつしや（不達者）二候間、こしま（小嶋）をたのみひきすりかへし、いまにおしこめ候、さためてあんすへく候へ共、身の見あいながら、てつはうのさきへこし、てをおわせ候共、

うちころさせ候とも、さためてそのときハこの入道をなうらミましく候間、一たんおいこめ候事ハ、くるしからず候とおもひ、そのためおしこめきめ申候、ようようとおもふへく候、かきさきけん三（柿崎源三）ももをうらおもてへうちぬかれ、やや二よりはるかへし候、又ちうけん（中間）まこ四郎も、てつはう二うちころされ候、いづれもかくし候間、このほかハしらす候、このことく二候間、てをおい候とも、いまきめ候よりハふうふのものともうらむへく候間、このたん申候、せいしを申候へ度共、なかなか身のいけんニハつかず候間、きやうこうハおりへ（吉江織部）そばにくよりほかニあるましく候、かへり候ハハ、ふうふながらふひん二候ハハ、まつまつあふましく候、あやまち候ハハ、ほへまわり候とも、よう二たつましく候、このことはかり申へきため、ふうふかたへししゆ二申候、めてたくかさねて、以上

（天正二年）八月七日（上杉）謙信（花押）

よし江おりへ（吉江織部）殿

与次ろうほ（老母）へ

なかじょうかげやすしよじょう

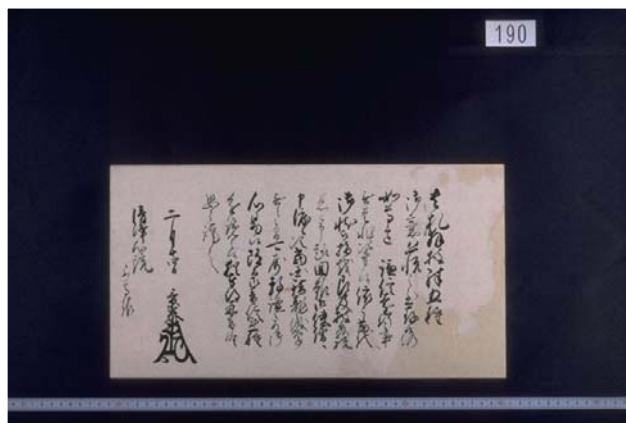
史料③ 中条景泰書状

天正7年（1579）2月14日

附属図書館所蔵 中条家文書

上杉景勝から高野山清浄心院宛ての書状の添え状として中条景泰が認めた書状。謙信の没後景勝が名跡を継ぎ、「当国錯乱之儀」（謙信の後継者争い「御館の乱」）は収まり、平穏になったことを知らせている。景泰は謙信に目をかけられ、吉江氏から名族中条氏に養子に入っていた。この書状からは景泰が景勝の側近に仕えており、二代にわたり重用されていたことがわかる。御館の乱の間、中条氏の本拠地・鳥坂城は上杉景虎方に奪われていた。当主不在の状況下、一族の築地資豊が城奪回に奔走し、

この年4月によく奪回する。しかし、景泰は中条の地へ赴くことがないまま、越中国魚津城の城将として遣わされた。



《翻刻》

貴札拝披、殊五種

御意恐悦之至存候、仍

如尊意、謙信遠行之事、

無是非次第候、依之、当代へ

御状被指越、即及披露祝

着被申趣、回報御使僧へ

申渡候、次当国錯乱之儀、差事

無之候間、可属静謐候、可御

心易候、随而御音信計一種

進覧之候、猶奉期再音之時候、

恐々謹言、

(天正七年)二月十四日

(中条)景泰

清浄心院

参尊法

史料④吉江宗閻書状

よしえそうぎんしよじょう

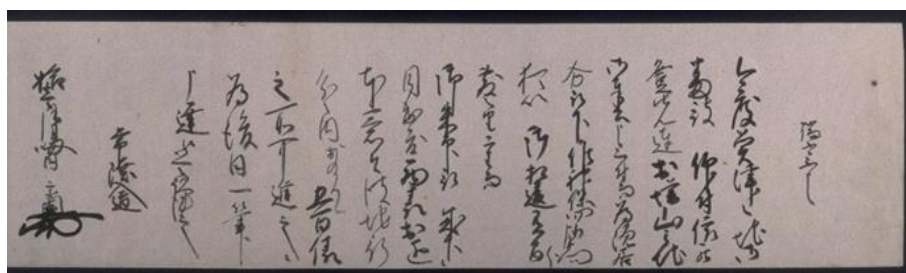
天正9年(1581)11月晦日

附属図書館所蔵 中条家文書

中条景泰の祖父に当たる吉江宗信(宗閻)が景泰に宛てた書状。越中方面(西表)

で手柄をたてたら、今回隠居のための経費として得た神保長住の旧領の内から500俵分

を分け与えると約束している。また、景泰の弟与橘には300俵を与えると別の書状で約束している。しかし、この約束は守られることなく、両名は魚津城において壮烈な戦死を遂げたのであった。



《翻刻》

端書不申候、

今度魚津之地御番被 仰付、依罷登、

先達於増山之地御奉公申上付而、為

隠居分被下候神保四郎左衛門尉分、

猶以 御相違有間敷之由、重而 御朱

印被 成下候、目出度西表於逐本意

者、彼地行分之内二おめて五百俵之

所可進之候、為後日一筆申達候、

恐々謹言、

常陸入道

宗閻(花押)

拾吉月晦日

越前守殿

参御宿所

《現代語訳》

今度魚津の地の守備を仰せつけられ

ましたので、罷り越します。先だつ

て、増山の地においてご奉公したお

り、隠居分として、神保四郎左衛門

尉の領地を差し下されましたが、相

違ないことの証として、重ねて御朱印

状を頂戴いたしました。めでたく西

表(越中戦線)において本意を遂げま

したら、その領地のうち、五百俵分を

進呈いたします。後日のため、一

筆申し達します。恐々謹言。

史料⑤ 魚津在城衆十二名連署書状

うおづざいじょうしゅうじゅうにめいれんしよしよ

天正10年（1582）4月23日

附属図書館所蔵

中条家文書

《翻刻》
当月五日・同十一日の御書御両通、昨夜戌刻自松倉到来、謹而奉拝見候、仍当地之儀、最前如申上候、壁きわ迄取詰、夜屋雖四十日雖相責申候、至今日迄相抱申候、此上之儀者、各滅亡与存定申候、此由可然様御披露奉頼候、恐惶謹言

中條越前守

景泰（花押）

竹俣三河守

慶綱（花押）

吉江喜四郎

信景（花押）

寺嶋六三

長資（花押）

夢沼掃部助

泰重（花押）

卯月廿三日

藤丸新介

勝俊（花押）

龜田小三郎

長乘（花押）

若林九郎左衛門尉

家吉（花押）

石口采女正

広宗（花押）

安部右衛門尉

政吉（花押）

吉江常陸入道

宗闇（花押）

山本寺松三

景長（花押）

直江与六殿

織田信長の部将・柴田勝家らに攻められ、守りについていた越中国・魚津城（現富山県魚津市）の武將たちが直江兼続に宛てた書状。この時期、上杉氏は謙信の後継争い「御館の乱」がようやく終結して後継者・景勝がその地歩を固めたばかりのところだったが、中央では信長の勢力が伸長し、武田氏が滅ぼされると、その矛先は上杉氏へ向いた。3月中旬、織田軍が魚津城をとり囲み、攻囲戦は以後二月半にも渡って続いた。4月23日付のこの書状で、中条景泰らの武將たちは滅亡必至を伝え、景勝に披露してほしい旨を兼続へ依頼している。結局6月3日に至り、城は陥落し武將たちは全員自害する。しかし、その前日の6月2日に本能寺の変が起きた

ため、侵攻軍は引き揚げていき、上杉氏は滅亡の危機から辛くも逃れた。

史料⑥ 上杉景勝朱印状

うえすぎかげかつしゅいんじょう

天正10年（1582）12月2日

附属図書館所蔵 中条家文書

魚津城攻防戦において、若干25歳で戦死した中条景泰の遺児・一黒が旧来の所領と新恩地を支配することを許した文書。新恩地については安堵状が現存しないが、景泰と共に戦死した祖父の吉江宗闇が、戦前に神保長住の旧領半分を景泰へ譲る旨を約束しているのが、この地を指すのかもしれない。一黒は、後に与次三盛と名乗り、上杉氏の会津移封後は鮎貝城（現白鷹町）に封ぜられた。関ヶ原の役の出羽における戦い（慶長羽合戦）では、栃窪口方面の与力として八ッ沼城（現朝日町）攻略に功績を上げた。しかし、関ヶ原からの敗報により退却と決し、退却戦で負った傷が元で死去した。

《翻刻》

知行之事、

本領・新地共二、

如亡父越前守代、

不可有相違、

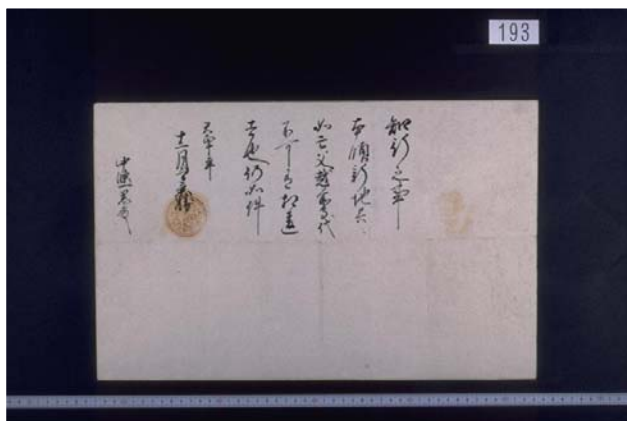
者也、仍如件

天正十年

十二月二日

景勝（朱印）

中条一黒殿



なおえじょう

解説② 直江状と関ヶ原の合戦

慶長5年（1600）4月、徳川家康は、西笑承兌を通じて、兼続へ宛て「謀反の嫌疑を晴らすため上杉景勝を上洛させよ」という内容の手紙を送った。理由は国元の仕置きを理由に景勝が上洛を延期していたためで、その裏では城を築き戦の準備をしている、と讒訴する者があつたからである。これに対し、兼続は同月14日、承兌に宛てて、訴えに対し逐一反論する手紙を送った。これが「直江状」である（史料⑦）。

兼続からの届いた「直江状」を読んだ家康は勿論激怒したに違いない。景勝の種々の行状について理路整然と説明するのみならず、言い訳・弁解に終始しているように感じて痛烈に家康を皮肉った内容となっているからである。家康は「兼続の若造」ときが」と歯噛みする思いであつたろう。

そしてこれが上杉討伐、更には関ヶ原合戦への引き金となったともいわれている。しかし、家康が激怒したというのは半分ポーズであつて、内心は上杉討伐の免罪符ができたことにほくそ笑んでいたのかもしれない。兼続もまた、挑発にまんまと乗ってきた家康に対して「してやったり」の心境であつたかもしれないのだ。

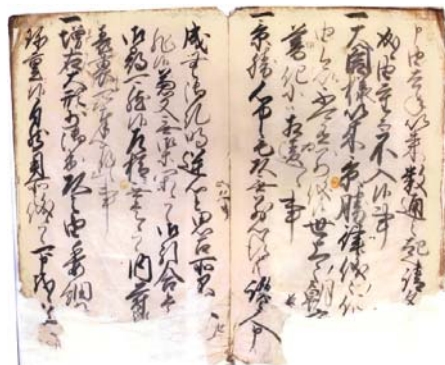
直江状の存在や真偽がまだ論争されるのは、「関ヶ原合戦」という歴史の大舞台にまで「直江状」の存在が関わってくるからで、石田三成と呼応して家康を挟み打ちにする密約があつたなどという説も、「直江状」が実際に存在したのであれば信憑性も増すことになるからである。

なおえじょう

史料⑦ 直江状（往来物）

附属博物館所蔵

「直江状」とは慶長5年（1600）4月14日、直江兼続が京都の豊光寺の僧・西笑承兌に宛てた手紙をいう。同年4月1日付けの承兌から兼続に宛てた「謀反の嫌疑のた



め上杉景勝を上洛させよ」という内容の手紙に逐一反論したものである。承兌は、連句などを通して兼続と交流があり、徳川家康のブレーンの一人でもあつた。

兼続の返書は家康の言い分に真つ向から対立するものであり、返書に名を借りた「家康への挑戦状」といった内容で「直江喧嘩状」等という物騒な呼ばれ方もしている。家康からの理不尽な言いがかりに徹底して反論、その内容は小気味がよく講談を聞くようなおもしろさがあるが。一方「直江状偽書説」

が消えないのは、その過激な内容によるものである。時の権力者にここまで慇懃無礼にモノが言えるのだろうか、という後世の人々の憧憬と憂いが偽書説を後押ししている。「直江状」の真偽はともかくとして、内容はまさしく兼続の「義」を示したものであるというよう。

山形大学附属博物館には「直江状（写）」が2通所蔵されている。一つは上杉の高級武士であつた「安田家文書」から見つかったもので、「NHK大河ドラマ特別展」（サントリ美術館・新潟歴史博物館の巡回展）に貸し出し中である。パネル展示のものは本館所蔵の往来物（寺子屋や私塾のお手本類）の中にあつたものである。

けいちょうで わ かつせん

解説③ 慶長出羽合戦と北の関ヶ原

慶長3年（1598）8月、豊臣秀吉が没すると、徳川家康は公然と秀吉の遺言に背き専横を行うようになり、これに対する反発から政局は混乱します。このような情勢下で、会津に帰国した上杉景勝は、少なくとも当初は家康と交流を続け、友好関係を保って

いました。しかし、慶長5年（1600）3月以降、上方では国元で築城や武器の調達を行う景勝に対し批判が急速に高まっています。これに対し、当初は弁明に努めていた景勝ですが、やがて会津への出兵が避けられないことを知ると、合戦の覚悟を固めました。

家康は6月18日、京都の伏見城を進発し、会津へと軍を進めます。7月17日、石



山形市公園緑地課作成パンフレットより

田三成が家康の非違（誤り）を正すとして挙兵に踏み切り、これを知った家康は小山で軍勢を反転させます。これにより上杉氏は家康との正面对決は避けられましたが、家康に味方し、侵攻の準備を整えていた最上氏の所領へ先手を打って攻め入りました。この戦いは「慶長出羽合戦」と呼ばれています。

9月9日、兼続に率いられた軍勢は、5方面に分かれて米沢を出発します。栃窪口の部隊は、八ッ沼城・鳥屋力森城（朝日町）を陥落させ、左沢へ進軍しました。中山

口の主力は、畑谷城（山辺町）を13日に攻略し、最上氏の本拠地・山形城に迫り、要衝・長谷堂城（山形市）（史料⑧）や上山城（上市市）を攻囲しますが、9月中旬から戦線は膠着状態に陥ります。9月30日、関ヶ原で西軍が敗れたとの知らせが兼続の元へもたらされ、上杉軍は会津へと撤退しました。

撤退戦において、兼続から殿軍を任された前田慶次・水原親憲隊は戸上山において奮戦し、味方の撤退を成功させました。この撤退戦はのちに敵であった家康からも称賛されたといわれています。

史料⑧ 長谷堂城大手門扉

はせどうじょうのおてもんとびら

山形市の西南の小山に築かれた長谷堂城は、山の麓を米沢・長井方面に向かう狐越街道が通る交通の要の地であり、周囲には池・深田・空堀が築かれた堅固な守りの城であった。

長谷堂城の築城者・築城年代は不明であるが、慶長年間には最上氏（徳川方）の要衝として城主・志村伊豆守をはじめとする最上軍の精鋭が配されていた。

慶長5年（1600）、豊臣方の直江軍が長谷堂城を囲み、膠着状態が続く中、9月30日に関ヶ原での東軍（徳川方）勝利の報が届き、上杉景勝は兼続に早々の退却を命じた。

さて、ここからが兼続一世二代の見せ場の始まりである。（あくまでも上杉方から見た視点ではあるが）



附属博物館所蔵

最上軍を引きつけては、鉄砲隊を仕掛けるなどの奇襲と（この時の鉄砲弾の跡が義光の兜に残っている）、沈着冷静な作戦により、直江軍はほとんど無傷で米沢に引き返すのであった。この撤退は後の世まで語り継がれ、徳川家康にして「あつぱれ汝は聞き及びし以上の武功の者」と言わしめるほどであった。

長谷堂城は最上改易とともに廃城となるが、城の門番を勤めていた者が大手門の扉を貫い受け、代々その家では囲炉裏上の梁につるして保管していたことから、虫食い等の被害にあうこともなく、400年後の現在まで残っていたのだった。

史料⑨ 掛入石

かけいりいし

米沢街道（現国道13号線）の上山市中山と川口の境にある巨岩（安山岩）。

慶長5年（1600）年の関ヶ原出羽合戦の際、撤退する直江軍（上杉勢）がこの窟に隠れ、最上勢から逃れたと伝えられている。

「窟に掛け入って隠れた」ので「掛入石」。また「隠れ石」と呼ぶ人もいるが、語源となった伝説は同じである。掛入石を境に中山から南は米沢領、川口から北は山形（最上）領であった。



関ヶ原出羽合戦当時、岩はタテ・ヨコ16m近い大きさで、窟には数十人も入ることができたというが、年月を経て明治29年の奥羽本線工事の際に割削され、今の姿となっている。

史料⑩ 三島県令道路改修記念画帖 其之三 山形県之巻

明治18年 絹本石版 高橋由一 原画

附属博物館所蔵

この画帖は、山形県初代県令（県知事）の三島通庸が、山形県の近代化を図るために県都の建設や土木工事を進めた際、その功績を残すために明治の洋画界の先駆者・高橋由一を招き、自らの造らせた道路等をスケッチさせて石版の画帖としたものである。

画帖は本県分のほか、三島が県令を勤めた福島・栃木県分の三県分が残されている。

史料⑪ 越後街道絵図

えちごかいどうえず

附属博物館所蔵

越後街道は越後の国（新潟県）と出羽の国（山形県）を結ぶ街道で、現在の国道113号線とルートをほぼ同じくする。

兼続が実際この街道を使用して越後と行き来したかは不明であるが、越後方面には米沢藩特産の青苔などを運び、越後方面からは魚や塩が入ってきた重要な街道であり、古よりの越後と出羽の縁を偲ぶ絵図となっている。

史料⑫ 文殊菩薩騎獅像

もんじゅぼさつきしぞう

永禄六年（1563）

附属図書館所蔵・山形市指定文化財

稚児姿の文殊菩薩が獅子に騎乗している姿を刺繍した掛け軸。「源末葉 永浦尼

上法光院住増圓

出羽國最上

中野内

壽昌寺住

源末葉

永浦尼

繡

永祿六年癸亥四月十七日



永祿六年 癸亥四月十七日」の

刺繡があり、最上義光の母と比定されている作者・永浦尼が1563年に刺繡し、寄進したものとわかる。当時上京していた義光の武運長久を願ったものと考えられている。この年代の刺繡仏で製作者のわかるものは少なく、美術史上も貴重なものである。本刺繡像は2007年6月、山形市八日町の寺院・宝光院より本字が授贈したもの。



永祿六年 癸亥四月十七日」の刺繡があり、最上義光の母と比定されている作者・永浦尼が1563年に刺繡し、寄進したものとわかる。当時上京していた義光の武運長久を願ったものと考えられている。この年代の刺繡仏で製作者のわかるものは少なく、美術史上も貴重なものである。本刺繡像は2007年6月、山形市八日町の寺院・宝光院より本字が授贈したもの。

史料⑬

御城下明細絵図

こじようかめいさいえず



明和3年（1766）、兼続の死後から140年余を経た米沢城下の屋敷割り図である。

慶長6年、越後からの移封当時の米沢は人口約6千人という小さな町であり、そこにおよそ3万人の家臣団とその家族が移転したことになる。ほとんどの家臣は住む家にも不自由し、食べる物にも事欠く生活を強いられたであろう。しかし、兼続の指揮のもとで力を合わせ、慶長14年（1609）

附属博物館所蔵

によりやく米沢城が完成した。

この絵図からは、入部当時二の丸までだった城に三の丸が作られ、家臣団への屋敷割りもなされ、城下町としての威容を誇るようになった当時の様子がよく伝わってくる。

もがみけさいじようしよかちゆうまちわりず

史料⑭

最上家が城諸家中町割図

（複製・印刷）

最上義光が行った大規模な改修工事後の城下絵図の写しである。筆写した原本は元和年間に作られたものとみられている。

上杉・伊達の両大名を意識し、町の南側（米沢方面）・東側（仙台方面）を中心に町を囲むように寺院を多く配置、いざ事が起れば寺院の敷地が要塞の代用となるようにしている。

敵・味方に関わらず、義光にとって上杉・伊達の両大名の存在は警戒すべきものであったようだ。

解説④

米沢藩士と直江状

直江状が見つかった米沢藩士・安田文書の中には、藩士間の書簡も含まれているが、その中に興味深い書状がある。

ひとつは、延享2年（1745）6月23日付の安田当主に宛てた「直江様の書状をお譲りいただきたい」という同僚・広居左京からの手紙であり、もうひとつは、同人からの「直江様の書状を差し上げていただいたことへの礼状」である。

延享2年といえは兼続の死後126年経った頃のことであるが、安田家に残されていた兼続の書状が、敬意をもって「いただく」「差し上げる」という対象になっていたことがうかがい知れる。越後時代に比べ、石高は移封のたび減らされ生活は困窮を極め

ても、謙信公をはじめ景勝・兼統と引き継がれた「義」の精神は米沢藩士の矜持であったことと思われる。

直江状にしても然り、振り仮名等が書き入れられていることから往来物の定義に入るであろうが、時の権力者に堂々と物申した心意気は米沢藩士の心の支えであり、あこがれでもあり、藩士の「座右の銘」のような存在として「直江状」は写され広まっていたものではないだろうか。

解説⑤ 山形県内に残る慶長出羽合戦の城

慶長出羽合戦（関が原の戦い）は、戦国時代の最後を告げる戦いとなりました。そのため、当時使われた山城が比較的良好い状態で残されています。その中でも実際に戦場になったとされる山城のようすをご紹介します。



掛入石(現在)

はせどう 《長谷堂城(山形市)》

直江兼統軍主力に包囲されましたが、最上方の武将・志村光安らが籠城し、半月あまりの間守り抜きました。主郭を中心として水堀や何重もの曲輪によって守られた典型的な山城です。



《畑谷城(山辺町)》 はたや

最上方の江口五兵衛光清が守りにつきましたが、直江兼統軍の主力に攻められ、激戦となり落城しました。館山山頂部を中心とする主郭を含む中心部、東側山麓部の空堀に囲まれた曲輪、西側の三重空堀の3つの部分に分けられます。



《八ツ沼城(朝日町)》 やっぬま

栃窪口方面の前線となり、最上方の守将・望月隼人正と上杉方の赤見外記・中条三盛らとの間で激戦となった末、落城しました。



とやがもり
《鳥屋力森城(朝日町)》

大瀬口からの侵攻ルート上に位置し、上杉軍の吉益右近らに攻められて落城しました。遺構が分散して分布しており、大きく主郭と4つの曲輪群に分けられます。



あゆかい
《鮎貝城(白鷹町)》

上杉方の城で、当時の城主・中条三盛がここから出陣しました。現在は鮎貝八幡宮が移築され、水堀や土塁などの当時の遺構をよく伝えています。



解説⑥ 文化人・直江兼続と

山形大学林泉文庫

りんせんぶんこ

直江兼続は、武将としての顔の他に、文化人としての顔をもっていたことで有名です。京都や朝鮮出兵のために在陣した名護屋では、頻繁に連歌会や茶会に出席しています。徳川家康との書状のやりとりを仲介した西笑承兌は当代一流の文化人であり、兼続の文化人としての活動は大名家の外交活動の一面ももっていました。

兼続は蔵書家としても有名で、蔵書は850冊にのぼり、その中には現在国宝に指定されている宋版三史『史記』『漢書』『後漢書』もありました。

明治41年、米沢の郷土史家・伊佐早謙は『稿本 清覧録』の中で、兼続の蔵書蒐集熱に触れ、「慶長の役（朝鮮出兵）のおり、兼続は彼の地で書籍をあつめることを命じており、そのために貴重な医学書『聖濟惣録』をはじめとした漢籍が米沢藩にある」ことを述べています（史料⑦）。

ところが、昭和32年、当代の著名な歴史学者が旧米沢藩蔵書を調査したところ、「宋版三史」はいずれも五山僧が所有していたもので、それが兼続に譲られたものであることが明らかになりました。

これにより兼続が朝鮮でも書物を蒐集したことは伝説であることが明らかになったのですが、伊佐早謙は兼続の書物蒐集熱をアピールすることで貴重な書物を守ろうとしたものと思われま

す。彼の努力により、旧米沢藩校興譲館の蔵書は現在も市立米沢図書館が所蔵します。一方、彼が収集した古今の書物は「林泉文庫」と称され、彼の死後上杉家に贈られたものの、戦後分散し、現在は、市立米沢図書館・米沢短期大学図書館・龍門図書館、そして当館（山形大学附属図書館）に所蔵されています。（史料⑮～⑯）。

史料⑮ おおたどうかんじょう 太田道灌状

おたどうかんじょう

上杉家記録編纂所総裁・伊佐早謙が蒐集した「林泉文庫」所蔵本の一つ。太田道灌は永享4年（1432）生まれ、文明18年（1486）没とされている。

鎌倉公方を補佐する関東管領上杉氏の一族である扇谷上杉氏の家宰であった家に生まれ、父からその職を継いだ。「道灌状」とは彼が山内上杉氏の家臣・高瀬民部少輔宛に、文明12年（1480）11月に出した書状のことである。

内容は「長尾景春の乱」（長尾家跡目相続に掛かる争い）での道灌自身の活躍について、39カ条にわたり書き記したものの、戦功を正しく評価されないことに対する主家への痛烈な批判が込められた内容となっており、行間からは無念の想いがにじみ出ている。同じ「状」とは付くものの、「直江状」との違いは両者の内面的根幹が「義」であるか「英」であつたかの違いであろうか。

江戸時代 筆写本 附属図書館所蔵

史料⑯ しゅんじゆう さしでん 春秋左氏傳

しゅんじゆう さしでん

安永6年（1777）3月刊、15冊

『晋』杜預集解、那波魯堂点校、『京都』中江久四郎刊

附属図書館所蔵 林泉文庫

上杉家記録編纂所総裁・伊佐早謙が蒐集した「林泉文庫」所蔵本の一つ。『春秋左氏傳』は単に『左伝』ともいい、孔子が編纂したとされる歴史書『春秋』への注記の形をとっている。ただし、独立した歴史書であるとの見方もある。著者は左丘明とされるが確証はない。いわゆる儒教經典の一つであり、江戸時代の日本において最も基本的教養書の一つであった。本書は播磨国姫路出身の漢学者・那波魯堂（1727・1789）が宝暦4年（1764）の旧版の誤りを改めて再版したもの。内容は『左伝』の本文を「経部」

と「伝部」に分けて併記し、晋の武将で学者でもあった杜預の注記を載せるもつとも一般的な形式である。

史料17 稿本 清覧録

こうほん せいらんろく

明治41年（1908）9月発行、伊佐早謙著、米沢市役所発行

附属図書館所蔵

上杉家記録編纂所総裁・伊佐早謙が皇太子殿下（のちの大正天皇）の巡幸に際し、米沢市長の委嘱を受けて、旧米沢藩の藩主・家臣らの知られざる業績をまとめた小冊子。

この中で、直江兼続が朝鮮在陣中に同地の書籍を蒐集したり、貴重な医書を書写させたりした逸話を紹介しており、これが後に兼続の愛書精神が伝説化するのに一役買った。

ところが、実際は伊佐早が前書きで述べているように「時日短く、大要を叙録し、もって委嘱に応じたり」「選択未だ精密を尽くさず」「真に蕪陋の稿本たるに過ぎず」というもので、ここに書かれた逸話は誤りだったことが後に明らかになった。

《原文（部分）》

文禄元年征韓ノ役兼続ノ景勝ニ扈從シテ肥前名護屋ニ在陣シタリ帯陣中濟世救方三百卷ヲ謄写セシメタリ後二之ヲ徳川幕府ニ献ジタリ其副本ハ米澤藩學興讓館ノ文庫ニ蔵シタリシカ明治四年文部省ヨリ之ヲ徴收セラレタリ想ニ必ス省内ニ現存スルナラン兼続ノ韓地ニ入りシヤ士卒ニ令シテ敵ニ貨財ノ略奪ヲ禁止シ専ラ圖籍ヲ收穫セシメタリ今現ニ米澤興讓館財団文庫ニ於テ保管セル朝鮮本ハ大抵当時ノ戦利品ナリト云フ

《現代語訳》

文禄元年の朝鮮侵攻の際、兼続は景勝に従って肥前名護屋に在陣した。帯陣中、『濟世救方』三百巻を書写させた。後にこれを徳川幕府へ献上した。その副本は米沢藩校興讓館の書庫に所蔵していたが、明治四年、文部省よりこれを徴収された。思うに必ず省内に現存しているだろう。兼続が朝鮮に入ると、部下に厳しく命じて財貨の略奪を禁止し、専ら書籍を収集させた。今現に米沢興讓館財団の書庫に保管している朝鮮本は大抵当時の戦利品だと言うことである。

参考文献

解説作成にあたり以下の文献を参考にさせていただきました。記して御礼申し上げます。

『中条町史』、『新潟県史』、『白鷹町史』、『米沢市史』、『上越市史』、『朝日町史』、『越佐史料』、『越中史料』、『歴代古案』、『史料纂集』古文書編、『上杉家御年譜』、『山形県中世城館遺跡調査報告書』

矢田俊文編『直江兼続』、木村徳衛『直江兼続伝』、今福匡『前田慶次―武家文人の謎と生涯』、片桐繁雄編『最上記』、米沢市上杉博物館『特別展上杉景勝』、米沢市上杉博物館『特別展直江兼続』、赤澤計眞『越後上杉氏の研究』、池享・矢田俊文編『定本上杉謙信』、井上鋭夫『一向一揆の研究』、矢田俊文・新潟県立歴史博物館編『越後文書宝翰集 古文書学入門』、佐藤博信『越後中世史の世界』、田村裕・坂井秀弥編『中世の越後と佐渡』、谷口克広『織田信長家臣人名辞典』、谷口克広『信長の天下布武への道』

パンフレット作成……高橋（附属博物館）、土屋（附属図書館）

展示資料一覧

史料 番号	資料名	所蔵者
1	中条家文書 天室光育書状	附属図書館
2	中条家文書 上杉謙信書状	附属図書館
3	中条家文書 中条景泰書状	附属図書館
4	中条家文書 吉江宗闇書状	附属図書館
5	中条家文書 魚津在城衆十二名連署書状	附属図書館
6	中条家文書 上杉景勝朱印状	附属図書館
7	直江状(パネル)	附属博物館
8	長谷堂城大手門扉	附属博物館
9	掛け入り石(写真パネル)	附属博物館
10	三島県令道路改修記念画帖(其之三)山形県之巻	附属博物館
11	越後街道絵図	附属博物館
12	文殊菩薩騎獅像	附属図書館
13	御城下明細絵図	附属博物館
14	最上在城緒家中町割図(複製)	附属博物館
15	太田道灌状	附属図書館
16	春秋左氏伝	附属図書館
17	稿本清覧録	附属図書館